

所蔵における優先序列：市町村立図書館における新書の選択

大場博幸

要約

同時期に発行された同質の書籍群をサンプルとして、公立図書館に所蔵されやすい属性を明らかにすることを試みた。2005年2月に、全国276自治体の市町村立図書館における、2004年4～6月発行の新書234タイトルの所蔵冊数を調べた。この結果を従属変数とし、小売書店が発表する売上序列や、新聞や雑誌に掲載された書評数、選定図書目録への掲載の有無など、需要や質的評価を表現する指標を独立変数として重回帰分析をおこなった。分析結果からは、第一に認知されたベストセラーが優先されていることが分かった。これ以外のタイトルでは、需用の多寡と属するシリーズのそれぞれが所蔵冊数に反映されていた。シリーズでは、特に岩波ジュニア新書・岩波新書が優先されていることが分かった。また、新聞・雑誌に書評が掲載されることや選定図書となることで表わされる質の高さは、特に影響を持っていなかった。

目次

1. はじめに
 2. 問題構成と既往研究
 - 2.1 需要と質の概念
 - 2.2 既往研究
 3. 所蔵調査と指標
 - 3.1 調査タイトル
 - 3.2 調査対象館
 - 3.3 所蔵調査の結果
 4. 所蔵に影響する要因の分析
 - 4.1 需要の指標
 - 4.2 質の指標
 - 4.3 重回帰分析の結果
 5. 考察
 - 5.1 認知されたベストセラー
 - 5.2 属するシリーズ
 - 5.3 需要
 - 5.4 選定図書と印刷媒体における書評
 6. 結論
- 注・参考文献
-

1. はじめに

日本の平均的な公立図書館は、どのような特徴を持った書籍を優先して所蔵しているのだろうか？ ベストセラーのような需要の多い書籍と、需用は少ないが質の高い書籍はどのようなバランスで所蔵されているのか？ 本研究ではこうした疑問を解くことを試みる。

公立図書館の蔵書が合理的かどうかの検証は、公的サービスとしての適性を評価するための基本的な作業である。ただし、「公的サービスとしての適正」がどのような基準で構成されるのかについての合意が無ければ、蔵書構成が明らかになっても、それを正しく評価できない。本研究は、そのような評価に踏み込むものではなく、公立図書館の蔵書にどのような傾向があるのかを描きだすのみに留まる。公立図書館の公共性の基準をめぐる議論は、まだ合意のある状態ではないからである。それでも、公立図書館の蔵書の傾向を客観的に把握することは、評価へのステップとして重要なことだろう。

また、ここで検討される「蔵書」は、公立図書館一館の蔵書ではなく、複数の市町村立図書館における蔵書の総計である。これまで単館での所蔵調査はおこなわれてきたが、複数の館をまたいだ蔵書の調査は多く無かった。そのため、大学の司書養成課程に活かされるような蔵書への実践的な知識が蓄積されてきたとは言い難い。だが、法的に役割が定義され、公的に運営される機関である限り、それぞれの公立図書館が個性的な蔵書構築を行っているとは考えられない。公立図書館の平均的な優先傾向について知見を得ることは、議論を活性化し、ひいては資料選択の面での反省を促すと期待される。

記述は次のような順序を踏む。第一に、既往研究について検討しながら、研究に必要な概念的枠組みについて論じる（第2章）。第二に、属性が明らかで比較可能な書籍タイトル群を選び、それぞれのタイトルの、諸公立図書館における所蔵冊数を調べる（第3章）。第三に、どのような属性がタイトル間の所蔵冊数の差を説明するのかを明らかにする（第4章）。第四に、分析結果について考察し（第5章）、最後に結論を述べる（第6章）。

具体的には、ほぼ同時期に発行された新書234タイトルを選び、次に発行8～10ヶ月後の全国276自治体の図書館における所蔵冊数を調べた。そして、所蔵冊数を従属変数とし、需用や質を反映する指標を独立変数とした重回帰分析を行った。端的に言えば、発行時期と版型、価格、内容や読者対象をある程度コントロールした書籍群をサンプルとし、同一の時点における公立図書館の所蔵数と、書籍に対する何らかの評価の序列とを比較するという手続きをとった。

2. 問題構成と既往研究

2.1 需要と質の概念

この研究において特に興味ある疑問は、公立図書館の所蔵に特に影響しているのは、一般的な需用に対する配慮なのか、それとも書籍の質に対する配慮なのか、という点である。

所蔵は、資料の持つ属性によって序列づけられる。属性として、オリジナリティの有無、内容の難易度、出版時期、価格、著者や出版社の信用、需要の多寡、対象となる読者層などを挙げることができる。この他に、ジャンルによっては文体や記述様式、参考文献の有無が判断材料になるかもしれないし、活字の大きさが重要な属性となるかもしれない。また、分類やジャンルによって、優先序列を表現する属性が異なったり、あるいは属性間の優先度が

変化することは一般的だろう¹⁾。

しかし、あらゆる属性が同程度に重要であるとは考えられない。いくつかは限られた資料候補の中でのみ重要な、鎖末なものだろう。19世紀から続く資料選択の議論では、蔵書が大衆的な要求を満たすものか、それともそうではない他の傾向が反映されるものかという点に関心が寄せられてきた（河井, 1987; 安井, 2006）。本研究でも、需用の多さがどの程度影響を持っているのかを計測したい。

需要については、ベストセラーリストなどへの掲載を指標として計測する。しかし、所蔵冊数の差がこの属性によってすべて説明されるとも考えられない。そこに還元されない所蔵冊数の差は、何らかの質的判断によると予想される。この研究では、そうした質的判断の差を表わす指標として、新聞雑誌への書評、日本図書館協会による選定図書への選定、属するシリーズ、分類を考慮した。こうした指標が質を表わすものとして合理的かどうかという問題もあるが、それについてはここでは議論しない。需用とは異なる判断基準があるというのが重要な点である。

蔵書における需要と質は、公立図書館にとってどのような意味を持つのだろうか？ それは、異なる読者層による嗜好を表現するものだと考えられる。すなわち、需要の多さは一般的な読者による嗜好を、書評数の多さや選定図書目録への掲載は読書家による嗜好を、それぞれ表現するだろう。知的レベルの差と言い換えてもよい。図書館がターゲットとしている実際の利用者が推測できるのである。

ただし、需要と質の関係は、価値論と要求論に代表される資料選択の主導権の問題に対応していないことに留意すべきである。読書家が利用者として質的判断に従った要求を図書館に対して行うこともあるであろうし、図書館員が一般的読者の嗜好に従って所蔵を決定することもあるだろうからである。この研究は、蔵書が図書館員の意図に沿ったものなのか、それとも利用者の要求の結果なのかについて判断しない。そもそも、価値論と要求論の見かけ上の対立とは異なり、蔵書が何らかの価値に従って構築されるとする議論は、利用者の要求に従った蔵書においても成立するのである（根本, 1990; 河井, 1995）。

需要と質の属性を表わす個々の指標については、第4章第1・2節で再び解説する。この節の最後に、諸指標の影響関係の解釈について説明を加えておきたい。

本研究で想定しているのは、書籍の有する属性が、所蔵数と指標にそれぞれに影響するという関係である。個々の指標が、図書選択の直接の判断材料になると想定していない。指標となる情報が限られたものだからである。もちろん、それが個々の図書館によって直接参照される可能性を排除するものではないが、多くの場合、図書館が扱う情報源と本研究で扱うそれが一致するかどうかは不確実である。したがって、諸指標と図書館の所蔵冊数との関係は因果関係ではなく、各タイトルが持っている属性が所蔵冊数と指標に反映された結果であると解釈した方が合理的である。

ただし、推薦図書目録への掲載、新聞や雑誌に掲載された書評数などの指標は、質の属性の反映と解釈できるだけでなく、直接所蔵に影響していると解釈することも不可能ではない。これについては、その影響を把握したうえで考察（第5章第4節）で検討したい。

2.2 既往研究

複数の図書館を対象に所蔵調査を行った実証的研究は、少数ながら存在する。ここではそ

れらを検討する。

北米においては、書評の影響力を検討した Serebnick (1981)、書評や取次による推薦などの影響を比較した Palmer (1988)、イデオロギーによるバイアスを検討した Harmeyer (1985) の実証研究がある。それぞれの研究結果は、書評の内容より数が多く掲載されていること、取次の判断²⁾よりも書評、内容がリベラル寄りの立場であることといった特徴が、所蔵を有利にすることを明らかにしている。しかし、これらの研究は、質的な属性にもとづく所蔵数を検討してはいるが、需用については関心が向けられていない。すなわち、比較する書籍の属性が十分にコントロールされていない。そのため、それぞれの研究結果の大筋は理解できるものの、所蔵の差が本当に焦点となった属性だけに由来するのか、疑問が残ったままである。

日本では、大村ら (1991) による、発行がほぼ同時期の書籍群の所蔵調査がある。サンプルとしたタイトルの内容が雑多で、やはり諸属性は十分考慮されていない。また、結論に関わるデータが数値で示されていないことに不満が残る。しかし、価格の影響については、需要や質的判断と対照されていないとはいえ、数値で示されている。安価ならば所蔵されるという知見は、常識的に考えても納得のゆくものである。

近年の実証研究として、日本図書館協会と日本書籍出版協会による『公立図書館貸出実態調査』(2004) は重要である。この調査は、1999年または2002年において、ベストセラーとなったかあるいはなんらかの賞を受けた書籍の、2003年夏の公立図書館における所蔵と貸出の数値を検討している。サンプルの発行時期はコントロールされている。それによれば、発行後数年経たベストセラーでも公立図書館では利用があることが示されている。また、公立図書館がノンフィクションよりも小説を多く所蔵する傾向にあることについてもほのめかされている。根本 (2004) は、この調査から、公立図書館では教養書よりも文芸書が優先されて所蔵されていることを指摘している³⁾。現在の公立図書館においては教養よりも娯楽が重視されているのである。

ベストセラーではないタイトルも比較対象に含め、かつ諸タイトル間の需要の差を考慮しながら、複数の要素の影響を考察した研究としては、大場 (2004) を挙げることができる。ただし、その調査対象は雑誌と新聞であった。それによれば、需要の多さと、創刊年で表わされる信用の二つが、所蔵数と強い関係を持っていた。

諸先行研究からは、日本の公立図書館が需要を反映した資料選択を行っていることがうかがえる。ただし、質への配慮がまったくなおざりにされているわけではなく、分野によっては強い考慮がなされていることがわかる。しかし、書籍において、需用と質がどのようなバランスで評価されているのかは明らかではない。

3. 所蔵調査と指標

3.1 調査タイトル

所蔵調査の対象となった書籍タイトルは、2004年4月～6月発行の新書234点である。発行月は、日本書籍出版協会 books.or.jp 書籍目録に準拠する⁴⁾。第1表にシリーズ名と調査点数、シリーズの創刊年を示した。それぞれのシリーズの調査点数は同期間内に発行された全タイトルである。

これらは、新書としてカテゴライズできるすべてのシリーズではない。だが、いわゆる教養新書⁵⁾に属する主要なシリーズは含まれている。また、日経文庫や講談社ブルーバックス、岩波ジュニア新書など、いくつかのシリーズはターゲットとする読者層や主題が他の新書シリーズと重ならない。これらは、分析の外枠を広くするために敢えて加えている。

新書がサンプルとして適切な理由は、ハードカバーや文庫などの形態に比べて、個々のタイトル間あるいはシリーズ間の競合関係がコントロールされている点にある。

第一に、他の形態と比べて価格差が小さい。新書の価格は600円台後半から1000円をやや越える程度の範囲におさまり、ハードカバーと比べれば価格が低廉で差が小さい。安価さは所蔵に有利に影響するだろう。だが、新書のような低価格本だけに選択肢を限れば、なおその選択肢の中でより安価なものが有利になるとは考え難い。したがって、新書を対象とすれば、価格の影響を無視することができる。

第二に、収録される文章が単行書籍として初めて出版されるものである。すなわち、書下ろしであるか、または雑誌記事としては公表されているが一般書籍としてまとめられるのが初めてのものである。文庫版は、新書と同程度の価格の発行形態だが、すでにハードカバーで刊行された作品の再録が一般的で、競合関係が複雑となる。

第三に、内容の難易度がある程度均一であると想定できる。新書の読者層を推定することが容易であるからである。出版者側は、新書の読者ターゲットを中年男性としていることを公言している⁶⁾。もっとも、岩波ジュニア新書や講談社ブルーバックスは読者層が一般の新書と異なる。しかし、それぞれ10代の青少年、後者は理工系学生あるいは出身者と、読者ターゲットは明瞭である。ハードカバー本ならば、内容や対象読者を統制したサンプルの選定は、時間と労力を要求するものとなるだろう。

他に新書がサンプルとして適切な理由として、版型が同一でその影響を考慮しなくてよいこと、ノンフィクションなのでフィクションよりは質的評価がしやすいこと、シリーズあるいは出版社の持つ特徴が比較的良好に認知されていること、などが挙げられる。

すなわち、他の書籍群ならば、競合可能なタイトルを再現するのにより多くのタイトルを調査タイトルに含めなければならず、なおかつ考慮すべき属性も増える。しかし、新書ならば、価格・版型と装丁・内容の難易度が均一のものとして考えることができ、他の書籍群を用いるよりは分析を単純化することができるのである。

3.2 調査対象館

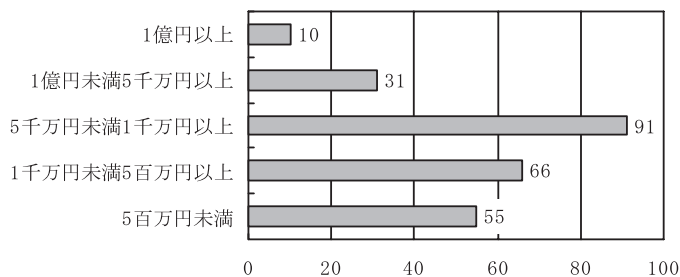
調査対象とした図書館は、全国18都道府県の図書館を持つ276市町村である。数値は自治体を単位とする。すなわち、一市町村が運営する、中央館・分館・移動図書館を含めた図書

第1表 シリーズ別の調査点数(中)とシリーズ創刊年(右)

岩波新書	12 / 1938
岩波ジュニア新書	11 / 1979
岩波アクティブ新書	9 / 2002
講談社現代新書	14 / 1964
講談社ブルーバックス	8 / 1963
講談社+α新書	16 / 2000
集英社新書	12 / 1999
新潮新書	14 / 2003
中公新書	13 / 1962
中公新書ラクレ	13 / 2001
NHK出版生活人新書	9 / 2001
文春新書	15 / 1998
河出書房KAWADE夢新書	5 / 1996
光文社新書	14 / 2001
ちくま新書	17 / 1994
日経文庫	12 / 1954
PHPエル新書	9 / 2002
PHP新書	12 / 1996
平凡社新書	13 / 1999
洋泉社新書y	6 / 2000
総数	234

館システムひとまとまりが一単位である。本研究では、煩雑さを避けるために、一自治体の図書館システムを「図書館」と表記することにする。

図書館の選定は調査上の便宜に従った。県立図書館による県内図書館蔵書横断



第1図 図書費別調査図書館数

検索システムに参加していることを第一条件とし、さらに ISBN で検索できることを第二の条件とした。ただし、検索可能な図書館数が少ない県に属し、書名などで検索しても応答速度の速い検索システムを持つ図書館も少数含めている。

所蔵冊数のデータは、2005年2月5日～3月1日の期間に取得された⁷⁾。調査期間が限定されているのは、時期の違いが所蔵数に影響しないようにするためである。

所蔵冊数に各図書館の規模がどの程度の影響するかについて疑問があるかもしれない。当然、分館が多ければ所蔵冊数は増加するだろう。そこで、『日本の図書館2004』に従い、資料費中の図書費別に図書館数の分布を第1図に示した。図書費を指標としたのは、新書に使用される予算枠をもっともよく表示しているためである。図には、数値が掲載されていない館は含めていない。第1図からは、国内全図書館の分布とどの程度違いがあるのかは不明だが、インターネットで蔵書検索が可能という事実から想像されるほど大規模な図書館に偏っているわけではないことがわかる。

3.3 所蔵調査の結果

第2表に所蔵調査の結果として特に上位40タイトル分を示した。全体の平均値は122.4冊、中央値は97.5冊、標準偏差は96.66である。

一見してわかることは、次の二点である。第一に、所蔵の多い上位三タイトルは2004年のベストセラーである。この三つは紀伊国屋書店ランキング（4章1節で詳述）の上位三つと重なる。第二に、続いて岩波ジュニア新書、岩波新書の所蔵数が多いことである。上記二つに該当しない他の新書シリーズの所蔵数は、岩波新書で最も所蔵数の少ないタイトルに続いてやっと表示される。

ここからどのような傾向が読み取れるだろうか？

4. 所蔵に影響する要因の分析

所蔵冊数はどのような蔵書傾向を表現しているのだろうか？ 一見すると、ベストセラーであることや、岩波新書・岩波ジュニア新書に属することは、公立図書館で選択されやすい属性であるかのように見える。これはそのとおりであるのか、それとも別の隠れた属性によってこれらが押し上げられているのだろうか？

この章では、諸属性がどの程度所蔵に影響しているのかを割り出すことを試みる。所蔵冊数を従属変数とし、需用や質を表わす指標を独立変数として重回帰分析を行う。これにより、どのような属性が図書館所蔵に有利であるかを明らかにできる。

第2表 所蔵上位40タイトル

(順位)	タイトル	著編者	シリーズ名	所蔵冊数)
1	死の壁	養老孟司	新潮新書	853
2	頭がいい人、悪い人の話し方	樋口裕一	PHP新書	753
3	上司は思いつきでものを言う	橋本治	集英社新書	398
4	憲法読本[第3版]	杉原泰雄	岩波ジュニア新書	334
5	樋口一葉	関礼子	岩波ジュニア新書	329
6	怒りの方法	辛淑玉	岩波新書	328
7	本 起源と役割をさぐる	犬養道子	岩波ジュニア新書	325
8	新・歩いて見よう東京	五百沢智也	岩波ジュニア新書	317
9	デジカメ自然観察のすすめ	海野和男	岩波ジュニア新書	316
10	日本の農業を考える	大野和興	岩波ジュニア新書	312
11	地球は火山がつくった	鎌田浩毅	岩波ジュニア新書	305
12	野口英世	井出孫六	岩波ジュニア新書	302
13	学習カトレーニング	海保博之	岩波ジュニア新書	301
14	古典がもっと好きになる	田中貴子	岩波ジュニア新書	300
15	フィールドワークは楽しい	岩波書店編集部	岩波ジュニア新書	289
16	日本縦断 徒歩の旅	石川文洋	岩波新書	286
17	教科書が危ない	入江曜子	岩波新書	274
18	障害者とスポーツ	高橋明	岩波新書	273
19	人生を肯定するもの、それが音楽	小室等	岩波新書	266
20	判断力	奥村宏	岩波新書	265
21	イスラーム主義とは何か	大塚和夫	岩波新書	262
22	政治献金	古賀純一郎	岩波新書	262
23	スコットランド 歴史を歩く	高橋哲雄	岩波新書	252
24	世界経済入門[第3版]	西川潤	岩波新書	251
25	精子の話	毛利秀雄	岩波新書	246
26	戦後政治の崩壊	山口二郎	岩波新書	246
27	ひとり旅は楽し	池内紀	中公新書	202
28	味のなんでも小事典	日本味と匂学会編	ブルーバックス	197
29	妻に捧げた1778話	眉村卓	新潮新書	193
30	カラー版 ギリシャを巡る	萩野矢慶記	中公新書	192
31	イラク建国	阿部重夫	中公新書	189
32	脳と音読	川島隆太・安達忠夫	講談社現代新書	184
33	カラー版 遺跡が語るアジア	大村次郷	中公新書	180
34	座右のゲーテ	齋藤孝	光文社新書	180
35	物語スペインの歴史 人物篇	岩根囿和	中公新書	179
36	釈迦に説法	玄侑宗久	新潮新書	176
37	幕末歴史散歩 東京篇	一坂太郎	中公新書	174
38	超ひも理論とはなにか	竹内薫	ブルーバックス	172
39	演技と演出	平田オリザ	講談社現代新書	168
40	「分かりやすい文章」の技術	藤沢晃治	ブルーバックス	168

4.1 需要の指標

結果を示す前に分析に投入する指標について解説する。

一般的な需要を表わす指標として、オンライン書店 Amazon.co.jp（以下 Amazon と略する）において掲載された書評数と売上ランキングを使用した。その理由について説明を加えておきたい。

一般書籍の実売部数を示すデータを入手することは難しい。そのため、タイトル間の売上序列のデータで代替せざるをえない。指標の候補は四つあった。紀伊国屋書店が2005年初頭

に発表した、2004年の新書売上ベスト300ランキング⁸⁾、Amazonにおける2004年2月28日AM10:00時点の売上ランク数、Amazonにおいて掲載された書評数と書評点、この四つである。

このうち、調査タイトル発行後の累積的な需要を表す指標としてもっとも信頼できるデータは紀伊国屋書店の年間売上ランキングである。しかし、ベスト300位以内に入る調査タイトルは52点となり、比較可能なデータが減る。この件数では、十分に信頼できる重回帰モデルを構築できない。そのため、このランキングと相関の高い他の指標を重回帰分析に投入することにした。

Amazonにおける売上ランク数は、調査タイトル全点をカバーする。だが、順位付けの基準が不明である。表示からは近日の売上動向を何らかの算定方法で算出したランキングだと推定できる。ランクは数時間毎に変動する。すなわち、調査日2004年2月28日から数日前までの需要の序列が表現されているが、発行後の累積の売上を示すデータではない。

Amazon 書評数は、一般読者が投稿した書評の数である。書評は日を経れば新たに投稿され、書評数は累積される。したがって、同サイトの売上ランクのような短期のデータではなく、長期のデータとして解釈できる。また、ベストセラーほど多くの数の書評を受けることから、獲得した読者の数が書評数に反映されると推定できる。すなわち、需要を表わすデータとして扱うことができる。ただし、ほとんどのタイトルはベストセラーランキングに載らないため、書評数が下位のランクにあるタイトルの需用を本当に反映しているかどうかを確認しようがないことは確かである。ここではとりあえず、獲得した読者の数と書評数は対応するとみなして議論をすすめる。データは単純に件数を数値とし、調査日の違いが書評数に影響しないように、2004年2月12日～17日の間に集計した。

Amazon 書評点は、各タイトルの web ページに掲載されている評点（星数）を指す。これは、一般の読者が投稿して1点～5点までの値を与えるシステムとなっており、投稿者の数が多くなれば書評点は平均化される。最低点は1点であり、書評の無いタイトルを0点とするわけにはいかない。そのため、相関を見る際にはそれらは省いている。その中でさらに、紀伊国屋書店ランキングに掲載されているタイトルを絞ると総数は47である。調査日は、Amazon 書評数と同様に2004年2月12日～17日である。

紀伊国屋書店ランキングと、Amazon の三つのデータとの相関を第3表に示した。紀伊国屋書店と Amazon のランキングは調査タイトル以外のタイトルも含み、ランクされた調査タイトル間に無意味な間隔が残る（例えば4位のタイトルの次が15位というように）。相関の計算に影響するためこれをそのまま適用せず、ランク数の最上位にあるタイトルに、調査点数 n を与え、次点以下に $(n-1)$, $(n-2)$, … と数値を付与して計算している。

第3表から、Amazon の書評数と売上ランキングに、年間の需用をあらわすデータとして中程度の信用を与えてもよいことがわかる。そのため、この二つを需用の指標として用いた。

第3表 紀伊国屋書店ランキングと Amazon の三データとの相関

	r	N
Amazon.co.jp Rank	0.452 **	52
Amazon.co.jp 評数	0.450 **	52
Amazon.co.jp 星数	0.022	47

*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$

4.2 質の指標

質的評価を表現する指標として、選定図書であるかどうか、または印刷媒体で書評を受け

たかどうか、属するシリーズ、分類を採用した。

選定図書は、日本図書館協会による図書館への推薦図書である。そこに選定されたタイトルは、図書館にふさわしいと専門家の考える要素を含んでいるはずである。選定されたタイトルは133点あり、選定されたタイトルを1、不選定のを0としてダミー変数化した。

印刷媒体で受けた書評として、新聞・雑誌に掲載された書評数を採りあげる。書評を受けたこと自体を肯定的評価とみなして数をカウントし、書評の内容は分析していない。Serebnick (1981)によれば、それぞれの書評が下す肯定的評価よりも、書評を数多く受けることが所蔵へ有利に影響するという。日本では、新聞や雑誌で書評される書籍が酷評を浴びることはほとんどない。そのため、書評の内容まで踏み込んだ検証は不要だろう。書評数は、雑誌『出版ニュース』の連載「新聞・雑誌書評リスト」において、調査対象となった書籍タイトルの書評数を集計したものである。その収録範囲は、新聞は五大紙と東京新聞、共同通信社によるもの7社、雑誌は総合月刊誌・一般週刊誌を中心とした20誌である。書評を受けた調査タイトルは57点だけで、ほとんどは1点の書評もない。

この他に、シリーズ、分類についても所蔵数との相関関係を検討した。特定のシリーズ、あるいは特定のジャンルが所蔵されやすいということがあるかどうか調べるためである。それぞれの属性は、該当する属性を持つタイトルを1、それ以外を0とするダミー変数として扱った。例えば中公新書ならば1、それ以外のシリーズは0とし、同様の作業を他のシリーズと類目についても行った。

なお、シリーズに関連する指標としてシリーズ創刊年も参考に用いた。

4.3 重回帰分析の結果

第4表に、どの指標が所蔵冊数と関係しているのか、重回帰分析を行った結果を示す。ソフトウェアにはJMP7を用い、要因のスクリーニングを行った。A列は、諸指標と、全タイトルの所蔵冊数との関係を調べた結果である。B列には、所蔵上位を占めるベストセラー3点と、岩波新書と岩波ジュニア新書に属するタイトルを除いたその他のタイトルの分析結果を示した。C列は、B列と同じデータを用い、シリーズに代えて創刊年を指標とした場合の結果である。なお、シリーズと分類の基準カテゴリは、それぞれ洋泉新書yと9類である。

A, B, Cのどのモデルでも、Amazon評数の標準偏回帰係数の値は高い。所蔵に対する需用の影響が大きいことをうかがわせる。

次に、属するシリーズによって所蔵数が異なることを指摘できる。第1表の創刊年と第4表A列を対照させると、古いシリーズほど有利であるかのように見える。だが、創刊年を扱ったC列より、シリーズを指標としたB列の方が自由度調整済R²値が高く、モデルのあてはまりが良いことから、創刊の古さではなくシリーズそれ自体への評価が所蔵に影響しているのだと解釈できる。

分類に偏りは認められず、書評の掲載や選定図書であることによって表わされる質の高さは、所蔵とあまり関係が無いと言える。

第4表 所蔵冊数に影響する要因の分析

	A:N=234	B:N=208 ^{注)}	C:N=208 ^{注)}
	標準β	標準β	標準β
Amazon.co.jp Rank	-0.034	-0.037	0.002
Amazon.co.jp 評数	0.651 **	0.796 **	0.773 **
新聞・雑誌書評	-0.019	-0.031	-0.029
選定図書	0.020	0.012	0.242 **
シリーズ創刊年			-0.171 **
岩波ジュニア新書	0.642 **		
岩波新書	0.537 **		
中公新書	0.285 **	0.337 **	
講談社現代新書	0.267 **	0.320 **	
新潮新書	0.259 **	0.283 **	
講談社ブルーバックス	0.221 **	0.266 **	
文春新書	0.182 **	0.217 **	
中公新書ラクレ	0.162 *	0.200 *	
平凡社新書	0.145 *	0.170 *	
岩波アクティブ新書	0.139 **	0.162 **	
ちくま新書	0.135 *	0.159	
講談社+α新書	0.119 *	0.137	
日経文庫	0.105 *	0.120	
集英社新書	0.098	0.106	
NHK生活人新書	0.097 *	0.113	
PHP新書	0.070	0.078	
光文社新書	0.047	0.044	
PHPエル新書	0.045	0.044	
河出夢新書	0.005	0.000	
洋泉社新書y	0.000	0.000	
NDC0類	-0.039	-0.064	
NDC1類	0.001	-0.012	
NDC2類	-0.017	-0.026	
NDC3類	-0.068	-0.111	
NDC4類	-0.037	-0.051	
NDC5類	-0.027	-0.044	
NDC6類	-0.028	-0.043	
NDC7類	-0.023	-0.051	
NDC8類	-0.082	-0.118	
NDC9類	0.000	0.000	
自由度調整済R ² 値	0.806 **	0.713 **	0.667 **

*:p<0.05 **:p<0.01

注) ベストセラー3点, 岩波新書, 岩波ジュニア新書を除く

5. 考察

5.1 認知されたベストセラー

所蔵数の上位3タイトルは、いわゆる「ベストセラー」である。

これらは、調査タイトル中における、紀伊国屋書店の年間売上ランキングの上位3タイトルであると同時に、Amazon 書評数の上位3タイトルでもあった。また、新聞・雑誌に掲

載された書評数も、3タイトル総合で10あり、調査タイトル全体の書評数の平均が0.35にすぎないことを考慮すればかなり多い。これらは Amazon 売上ランキングにおいては上位14タイトル中に含まれるという程度であるが、その理由はこのランキングの算定方法が、一時的な需要を反映するものにすぎないからであろう。

しかし、これら3タイトルの次に需要の多いタイトルの、所蔵に占める位置を知るのは難しい。4番目のタイトルは、紀伊国屋書店のランキングでは『怒りの方法』（辛淑玉著・岩波新書）、Amazon 評数では『精神科医になる』（熊木徹夫著・中公新書）である。前者は、比較的多く所蔵されているけれども、需要で劣るはずの岩波ジュニア新書に属する2つのタイトルを所蔵数において越えることができない（第2表参照）。後者は、Amazon 評数から話題作と認められるのに所蔵冊数の上位40タイトルに入ることができない（所蔵順位は63位である）。

おそらく、4番目のタイトルは、需要が突出して高いタイトルとして世間的に「認知」されていないのだと考えられる。上位3タイトルは、マスメディアが伝える週間または月間のベストセラーランキングに掲載されることで認知されてきたはずである。また、それらは多くの小売書店で平積みの扱いを受けただろう。しかし、4番目以降のタイトルは、上位3タイトルほど露出の機会に恵まれていなかったと推測される。したがって、所蔵に有利さをもたらす第一の属性は、ベストセラーとして「認知されている」ことだと推定できる。

突出して需要が高い数タイトルは、質的評価とは無関係に所蔵へ反映される。この点は、そうではない他のタイトルと大きく違うところである。

認知されたベストセラー三冊の内部における序列は、諸指標に従う序列とはなっておらず、はっきりしない。3タイトル中、紀伊国屋書店のランキングでは2番目、Amazon の書評数では3番目の『死の壁』（養老孟司著・新潮新書）が、公立図書館ではもっとも多く所蔵されている（第2表参照）。

この現象は、これが図書館独自の選好の結果でないとしたら、需要される時期や期間などが影響しているのだと考えられる。『出版ニュース』の連載「全国ベスト・セラーズ調査」の、2004年4月期以降のランキングの推移を追うと、『死の壁』は発売当初からランクが高い一方、需要を示す諸指標すべてでもっとも高い値を示す『頭がいい人、悪い人の話し方』（樋口裕一著・PHP 新書）は同年10月以降にやっとランキング入りする。公立図書館がこうした需要の動向を遅れて反映するならば、所蔵調査をより後の時期に行うと、『頭がいい人、悪い人の話し方』の所蔵冊数はより多くなると推定できる。この予想が正しければ、ベストセラー内部における所蔵優先の論理も、長期的にみれば需要の序列に従うものと見ることができる。

5.2 属するシリーズ

認知されたベストセラー以外のタイトルにおいては、属するシリーズと Amazon 評数のどちらからも相関が認められる。先に属するシリーズについて考察する。

所蔵冊数が特に多いのが、岩波ジュニア新書と岩波新書である。所蔵冊数の上位4位から26位までの23タイトルは、すべてこの二つシリーズに属する（第2表参照）。第4表Aからは、その優位は、属するシリーズのブランド価値から説明するのがもっとも合理的である⁹⁾。岩波書店の二つのシリーズに続いて、中公新書や講談社現代新書に属するタイトルが、相対

的に有利に所蔵されている。シリーズに対する信用が資料選択に影響しているのである。

シリーズのブランドとは、図書館にとって何を意味するだろうか。それは、認められたブランドのシリーズは、質の高いタイトルを多く含んでいる確率が高いということである。結果、有利なブランドに属するタイトルは、図書館に多く所蔵されるだろう。

実際、ブランドに対応した資料収集も行われてきている。ある公立図書館は出版社単位で資料選択を行うことを報告している（竹内、1989）。また、出版社またはシリーズ単位で購入する“ブランケットオーダー”の慣行があることは周知のことである。

ただし、特定シリーズの質を過信して所蔵を決めることには問題もあるだろう。今世紀00年代の新書シリーズにおいて、岩波新書はずば抜けて高い価値を持っているシリーズであるという世間的な合意があるわけではない。（一方、岩波ジュニア新書については、同じ読者対象を持つノンフィクションシリーズがこの時点で無かった、という点で所蔵数の多さを理解できるかもしれない）。中公新書が、岩波新書と同程度かそれ以上に信頼できるシリーズであるという評価も聞く。したがって、岩波新書と中公新書の間には、所蔵冊数において大きな差がつくほど質の開きがあるとは考えられない。これは、優先序列に不合理さが感じられる点である。

5.3 需要の多さ

認知されたベストセラーでなく、岩波新書・岩波ジュニア新書に属さないタイトルでは、属するシリーズの比重だけでなく、Amazon 評数の比重も高い（第4表B列参照）。すなわち、需用の影響が大きいということである。

図書館側がどのような経路から需要を感知しているのかは不明である。これらはベストセラーではないので、個々の図書館がタイトル間の売行きを比較する機会はないはずである（Amazon の書評数を参考にしていれば話は別だが）。利用者からの要求に応じてきた結果そうなるのか、それとも図書館側の資料選択は、需用の指標に近いものになってきているのだろうか？ 個々の図書館が貸出冊数のデータから需要を予測することは可能だろう。そうでなければ、取次会社の推薦が需用に近いものになっている可能性も考えられる。興味深い問題だが、ここではこれ以上この件について深追いしない。

5.4 選定図書と印刷媒体における書評

選定図書であることと新聞や雑誌で書評を受けること、これらから推定されるタイトルの質の高さは、所蔵冊数と無関係である。ここから、良書であることは特に所蔵に有利さをもたらさないという結論が導かれる。図書館における質の判断は、シリーズ・レベルでの判断に留まり、個々のタイトルの質をあまり考慮していないと言える。

次に、書評も選定図書も質的評価の反映とした上のような因果解釈に代えて、所蔵数は書評と選定図書の直接の影響を表わすものとみなして考察してみる。

『公立図書館貸出実態調査』（2004）によれば、『選定図書目録』を資料選択にどの程度参考に行っているかを図書館員に訪ねている。それによれば、毎回あるいは時々利用すると答えた自治体は約55%である。また、速報に掲載されたタイトルを全資料中何割購入しているか尋ねた設問では、1%から70%まで非常にばらつきがあった。そのため、この報告から、速報の影響力を割り出すことは難しかった。だが、今回の分析でその影響ははっきり否定でき

る¹⁰⁾。

同様に、書評が新聞・雑誌に掲載されることの影響も否定できる。この点は、書評が影響する米国図書館とは異なっている (Serebnick, 1981)。日本の図書館への書評の影響力の無さを指摘する主張 (河井, 1994; 清水, 1994) は以前から存在したが、分析結果はこの見解を支持している。

6. 結論

以上の研究から、次のような優先序列が明らかになった。

- ① 認知されたベストセラー
- ② 上記以外のタイトル
 - ②-1 需要の多さ・関心の高さ
 - ②-2 ブランド力のあるシリーズに属すること

新書所蔵の優先度は、第一に認知されたベストセラーであるかどうかで決まる。そうでないタイトルは、需要と属するシリーズによって判断される。ベストセラーでないタイトルのうち、需用の多寡に関わらず、岩波ジュニア新書・岩波新書は特別有利に所蔵される。岩波ジュニア新書・岩波新書でないものは、需要にやや高い比重をおきながら、属するシリーズも考慮されて所蔵の優先度が決定されている。

概して、公立図書館の需要に対する配慮は強いと言える。質への配慮もあるが、その合理性について反省が求められるものである。質的評価が、属するシリーズに基づくものになっており、個々の書籍に対する評価とはなっていないからである。

こうした傾向は新書以外の書籍でも同様だろうか？ 今後の検証が待たれる課題である。

注

- 1) 分野によって評価するポイントが異なるというのは、代表的な概説書である『新版 蔵書構成と蔵書選択: 図書館員選書4』(河井弘志編, 1992) の構成からも明らかである。
- 2) 「取次による推薦」とは、“approval plan” のことである (Palmer, 1988)。
- 3) 根本, 2004. P.55-56.
- 4) 日本書籍出版協会 <<http://www.books.or.jp>>
ただし洋泉社新書 y は、調査時に Books.or.jp にデータが採録されていなかったため、奥付に準拠した。また、PHP 新書発行タイトルのうち2点は、奥付の発行月が7月となっているが、Books.or.jp のデータに準拠した。
- 5) 一般に新書シリーズは、岩波新書を代表とする教養新書と、光文社カップブックスを代表とする実用新書に分けられる (清丸, 2001, p.23-59)。
- 6) “新書の中心読者層というのは圧倒的に中年・壮年以上の男性です。(中略)。99年以降の後発で始まった新書シリーズの中には、若者や女性の取り込みを狙ったものもありますが、読者層を広げるといふ点ではいま一つの結果に終わっています。” (新書マッププレス編, 2004, p.974-975.)

- 7) 第5表に、調査対象となった県別図書館数と、調査日を示した。
- 8) 紀伊國屋書店 bookweb. 2004年新書売上げベスト300. (現在リンク切れ)
 <<http://bookweb.kinokuniya.co.jp/>>以下. (2004-2-28参照)
- 9) 岩波新書と岩波ジュニア新書が優先されるのは、買切制のためだという反論が予想される。そうした反論に従えば、買切制を採る出版社では、そうでない出版社より在庫が少ない可能性が高く、品切れに対応するため、公立図書館は発行後早い段階で数を多めに購入するというのである。しかしながら、買切制が所蔵に有利に影響するという説は成り立たない。なぜなら、同様に買切制に従う岩波アクティブ新書が、所蔵において特別有利な扱いを受けていないからである (第4表参照)。
- 10) 選定図書に掲載基準については疑義が残る。一点も掲載されないシリーズと、全点掲載されるシリーズの差は大きく、合理性が無いようにみえるからである。選定図書それ自体の評価が必要だろう。

第5表 県別調査図書館数と調査日

県名	図書館数	調査日
福島県	2	2005/2/5
兵庫県	2	2005/2/5
沖縄県	7	2005/2/5
高知県	7	2005/2/7
広島県	8	2005/2/7
宮崎県	8	2005/2/8
佐賀県	9	2005/2/8
鳥取県	7	2005/2/8
岩手県	11	2005/2/9
千葉県	17	2005/2/11
富山県	19	2005/2/14
栃木県	27	2005/2/15
山梨県	20	2005/2/16
三重県	24	2005/2/17
京都府	22	2005/2/17
大阪府	16	2005/2/18
東京都	42	2005/2/26
北海道	28	2005/3/1

米国では、公共図書館向け推薦図書目録“The Public Library Catalog”が、必ずしも分野を代表する著作を選んでいないことが批判されている (Dilevko & Gottlieb, 2003)。また、“The Public Library Catalog”などの推薦図書目録における、ベストセラーまたはピューリッツァ賞受賞作の掲載頻度を検討した Budd の研究も興味深い (Budd, 1991)。

参考文献

- Dilevko, Juris and Lisa Gottlieb (2003) “The Politics of Standard Selection Guides: The Case of The Public Library Catalog” *Library Quarterly*. Vol.73, No.3, p.289-337.
- Harmeyer, Dave (1995) “Potential collection development bias: some evidence on a controversial topic in California” *College & Research Libraries*. Vol.56, p.101-11.
- Palmer, Joseph W (1988) “Factors responsible for the acquisition of Canadian fiction by U.S. public and academic libraries” *Library Acquisitions*. Vol.12, p.341-356.
- Budd, John M (1991) “Best sellers and pulitzer prize winners: core or not?” *Collection Building*. Vol.11, No.1, p.9-13.
- Serebnick, Judith (1981) “Book reviews and the selection of potentially controversial books in public libraries” *Library Quarterly*. Vol.51, No.4, p.390-409.
- 大場博幸 (2004) “暗黙の選択基準：市町村立図書館における新聞・雑誌所蔵”『Library and Information Science』No.52, p.43-88.
- 大村ちず子 (1991) “公立図書館は今どんな本を購入しているか：望ましい選択基準のあり方を考える”『図書館界』Vol.43, no.2, p.83-88.
- 河井弘志 (1987)『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』日本図書館協会。

- 河井弘志編（1992）『新版 蔵書構成と蔵書選択：図書館員選書4』日本図書館協会.
- 河井弘志（1994）“書評と図書館”『図書館雑誌』Vol.88, No.9, p.678-680.
- 河井弘志（1995）“図書選択理論の争点”『現代の図書館』Vol.33, No.2, p.91-106.
- 清水英夫(1994) “日本の書評：なぜ権威がないのか”『図書館雑誌』Vol.88, No.9, p.681-683.
- 新書マッププレス編（2004）『新書マップ：知の窓口』日経BP社.
- 清丸恵三郎（2001）『出版動乱：ルポルタージュ・本をつくる人々』東洋経済新報社.
- 竹内紀吉（1989）『浦安図書館と共に』未来社.
- 日本図書館協会；日本書籍出版協会（2004）『公立図書館貸出実態調査2003報告書』
<<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jla/kasidasi.pdf>>（2005-6-1参照）
- 根本彰（1990）“「要求論」の限界とコレクション形成の方針”『図書館学会年報』Vol.36, No.3, p.121-127.
- 根本彰（2004）『続・情報基盤としての図書館』勁草書房.
- 安井一徳（2006）『図書館は本をどう選ぶか』勁草書房.